

# 故・西和夫先生を偲ぶ

東海大学教授 小沢 朝江

西和夫先生が今年1月3日に亡くなられた。今年7月には喜寿を迎える予定で、年賀状には「まだまだ身体の動くうちは各地へ出かけて行って、歴史と文化を大切にしてお手伝いをしたい」と書かれていたのに、まるで時計が止まったように突然逝ってしまわれた。

西先生が地域の歴史的建造物や町並み保存に、特に力を注ぐようになったのは平戸市の町並み調査を始めた2000年頃、60歳を過ぎてからで、「これからは町づくりに生きたい」と会うたびに話された。その言葉通り、いきいきと全国を飛び回り、魅力的な建築を発見した。「文化財ではないから残せない」という人たちに、「どんな大事なものも指定されるまでは文化財ではない」と論

し、「皆さんが大切だと思うものは全て文化財である」と説いた。

昨年8月に横浜で開かれた旧三井物産横浜支店倉庫の取壊し問題に対するシンポジウムでも、「今日集まった人たちが残そうと思うことが一番大切」と話されていた姿が記憶に新しい。

「まちに出よう、旅に出よう」が口癖だった先生は、きっと今もどこかに旅をしているに違いない。



旧三井物産横浜支店倉庫の保存を訴えるシンポジウムを総括する西和夫先生

## 横浜市で景観条例に基づく「特定景観形成歴史的建造物制度」の運用開始！

歴史的建造物は、昭和25(1950)年に制定された建築基準法の施行より前に建てられていることから、改修等を行う際に現行法に全てを適合させることが困難となっており、保全活用を進めるうえでの大きな課題になっている。

「特定景観形成歴史的建造物制度」は、横浜市魅力ある都市景観の創造に関する条例(景観条例)の改正により創設され、歴史的建造物を指定することで、建築審査会の同意を経て、建築基準法の適用除外(建築基準法第3条第1項第3号「その他条例」)が可能となる。

平成26(2014)年7月1日から運用が開始され、適用実績は未だないものの、法的担保性の向上と建築基準法の柔軟な適用が可能となり、景観上優れた歴史的建

造物を保全活用していくためには有効な制度であると期待される。

- 対象建造物 登録又は認定歴史的建造物等のうち、外観の保存と内部の一部保存を行いながら、内部の活用を推進する必要のある建造物
- 制度の概要 ①指定にあたっては、横浜市都市美対策審議会、横浜市歴史的景観保全委員の意見を聴くとともに、所有者の同意を得る ②指定を行う場合は、「保存活用計画」を策定 ③所有者は、保存活用計画に沿った建造物の管理を行うとともに、現状変更等にあっては事前に市長の許可が必要 など

# 公益社団法人 横浜歴史資産調査会 のとりくみ

—YOKOHAMA HERITAGE

## ヨコハマヘリテイジ講演会

### 【旧三井物産横浜支店倉庫の保存を訴えるシンポジウム】

明治43年建造の旧三井物産横浜支店倉庫の取り壊しを知ったのは昨年7月末だった。横浜の絹貿易の生き証人として重要な建物が壊されるとは誰もが「まさか」と耳を疑る「寝耳に水」だった。所有者の担当部長と面会したが「取り壊しの手続きは、横浜市と調整し合法的に進めてきた」との説明であった。



講演会・シンポジウムの様子

これを受けて当公益社団内部では役員と協議を開始。とにかく保存を広く市民に呼びかける意味を込めて「緊急シンポジウム」を8月5日(火)に開港記念会館で開催した。折しも横浜の花火大会だったが、120名を超える皆さんが集まり盛会となった。当公益社団の役員7名が総がかりでのぞんだシンポジウム会場は熱気に包まれた。基調講演の中で堀勇良(建築史家)は、富岡製糸場をはじめとした群馬県の絹関連遺産が世界遺産に登録される中、肝心

要の旧三井物産横浜支店倉庫が壊されるのは言語道断と訴えました。その後、水沼淑子(関東学院大学教授)、鈴木伸治(横浜市立大学教授)、大野敏(横浜国立大学教授)、吉田鋼市(横浜国立大学名誉教授)が次々に登壇、歴史的文化的価値の高い同倉庫の保存・活用案を含めた提案を行った。コーディネーターの米山淳一が会場からの意見を取りまとめ、最後に西和夫(神奈川大学名誉教授)が大会アピールを採択すべきと提案しました。



旧三井物産株式会社横浜支店倉庫

【文:米山淳一】

### —アピール全文—

横浜に残る生糸文化の礎をみんなで守ろう。旧三井物産横浜支店倉庫(明治43年竣工)は、横浜の「歴史を生かしたまちづくり」を推進する上で重要な歴史的建造物であるとともに、日本のシルク遺産として世界遺産になりうる建造物であります。このような世界遺産的価値を有する建造物の取り壊しは、横浜市民としては許すことができません。是非とも次の世に横浜の宝として守っていくことを決意し、広くアピールします。

平成26年8月5日  
旧三井物産株式会社横浜支店倉庫の保存を考える緊急シンポジウム参加者120名一同

---

西和夫(神奈川大学名誉教授・公益社団法人 横浜歴史資産調査会 相談役) / 吉田 鋼市(横浜国立大学名誉教授)  
堀 勇良(建築史家) / 水沼 淑子(関東学院大学教授) / 鈴木 伸治(横浜市立大学教授)  
大野 敏(横浜国立大学大学院教授) / 米山 淳一(公益社団法人 横浜歴史資産調査会 常務理事・事務局長)  
旧三井物産株式会社横浜支店倉庫の保存を考える緊急シンポジウム事務局  
公益社団法人 横浜歴史資産調査会

## 「歴史を生かしたまちづくり相談室」は順調

横浜の「歴史を生かしたまちづくり」を昭和63年から開始して25年を迎えたことを契機に、当公益社団の自主事業として平成26年度下半期からスタートした「歴史を生かしたまちづくり相談室」は平成27年1月下旬まで合計11件の問い合わせがあり順調な滑り出しとなりました。

「長年住み慣れた住居をなんとか残したい」、「洋風建築の様だが、歴史的に見てどのような価値があるのか?」、「寺の山門を修理したいが方法を知りたい」、「歴

史に理解のある方に住まいを売却し、住み継いでいただきたい」など様々な問い合わせをいただきました。

これらのお問い合わせに即座にお答するために毎週水曜日に当公益社団事務所にて横浜市都市デザイン室担当、神奈川県景観保全担当者、時には専門家らを迎えた定例会を設け、対応策を検討しています。この会議で方針が定まると当公益社団の理事や神奈川県ヘリテイジマネージャー等が現地でも所有者へのヒヤリング、現況調査、保全のための詳細調査など臨

機応変に対応しております。

将来に向けた横浜の「歴史を生かしたまちづくり」の有効な手法として今後も積極的に推進して参ります。

情報をございましたら引き続きご連絡をお待ちいたしております。

### 公益社団法人 横浜歴史資産調査会 (ヨコハマヘリテイジ) とは?

歴史的建造物に係る専門家等の団体。昭和63(1988)年に「横浜市歴史的資産調査会」として発足し、以来20年間にわたり、横浜市と連携して歴史的建造物の調査や保全活用に関する研究を進め、「歴史を生かしたまちづくり」を推進している。歴史的資産の保全活用に関する調査研究のほか、セミナーや見学会等の普及啓発の他、歴史的建造物取得保存のための募金活動を行っている。平成25(2013)年に公益社団法人となった。



相談物件(戸塚区) 2015年1月



歴史を生かしたまちづくり 25th

歴史を生かしたまちづくり



第30号

平成27[2015]年  
2月21日発行  
Since 1989



撮影:米山淳一

## 道とともに伝える歴史的景観

—鈴木家長屋門—

横浜国立大学大学院教授  
公益社団法人 横浜歴史資産調査会 理事

大野 敏

### 今

から37年前の昭和53年(1978)、『市民グラフィコハマ 第25号』は「田圃の遺産—横浜の長屋門—」を特集した。そこに横浜国立大学建築学科関口欣也研究室(当時)の大学院生(田高敏郎・鷹本宏明・中村安の3氏)による市内の長屋門調査成果20件が掲載された。その目的は「消えつつある長屋門を市内のあちこちに訪ね探し、所有者のご好意によって誌上保存を試してみた」のであった。この危機意識は、当時保存措置がなされていた建築が20件中1件(重要文化財岡家長屋門)だったので理解できる。しかし本年1月に20件の所在確認をしたところ、なんと19件が存続していた。うち6件は市文化財2件・市認定4件として保存がはかれており、昭和63年施行の横浜市文化財保護条例と歴史を生かしたまちづくり要綱による保存施策拡充の成果といえる。とはいえ残る12件は保存施策と別に維持継承されてきたもので、所有者のご尽力にあらためて敬意を表したい。ところ、長屋門とは、門両脇に居室・物置・警護所・馬屋などが接続して一体化した建築で、武家屋敷表門における重厚な長屋門が知られている。そして長屋門は近世封建制のもとで武家以外の有力層にも建築が認められ、近代には2階建てや軒の高さ、扉や格子窓の豪華さを誇るものが増える。しかも長屋門は有力者屋敷の表構えとして街道等の主要道に臨むことが多いので、長屋門の存続は屋敷だけでなく旧道を含んだ周辺景観の保全にも有効である。

さて、筆者はこのたび上記12件の長屋門(保存施策外で維持継承)のうち、旭区今宿西町に所在する鈴木家長屋門の調査機会を得た。所有者と行政が長屋門の将来について話し合中で、その建築的魅力を詳細に把握することが求められたためである。鈴木家は江戸時代に今宿村名主を務めた旧家で、屋号は世古と称する。屋敷は旧八王子街道(現国道16号)から今宿

西交差点を旧鎌倉街道へ北折して数十m進んだ東側に構える。この旧鎌倉街道をさらに2~300m進むと鈴木家開基の本立寺と今宿村鎮守の三宮神社が所在する。長屋門は屋敷南辺中央に構え、その前方は旧街道から引き込んだ広場的な空地を持ち、かつて高札場も置かれた。昭和39年まで長屋門の奥に大型茅葺主屋と文庫蔵が所在したが、現在は新主屋が建つ。しかし屋敷内は土蔵2件と隠居家の歴史的建築をどよめ、庭園・植栽を含めた屋敷環境も長屋門とともに魅力がある。長屋門の建築概要は、間口8間(48尺、約14.5m)、奥行3間(18尺、約5.5m)で南面し、中央に間口2間半(15尺、約4.5m)の通路部を設け、その東側と西側に居室を設ける(以下東室、西室と呼ぶ)。通路部の扉構えは正面柱筋から4尺(1.2m)内側に設け、太い親柱を立て中央を通用口とする。屋根は寄棟造・銅板葺で屋頂に鬼板付の大棟を掲げ、4隅に鬼板付の隅棟を延ばす。建築年代は明確でないが、安政の大地震に耐えたと伝えられるので、幕末頃の可能性がある。なお、間口8間は市内長屋門として中規模であるが、奥行3間は最大で、13尺(約4m)ある軒高は見上げるような高さを誇る。現在西室・東室ともIDKの居室に改装して貸室とする。しかし本来居室だったのは、正面に出格子窓をもち室内に内法長押が残る西室だけで、その出入口は背面中央にあった。一方、東室も背面中央に出入口の痕跡が残る、その痕跡から判断して本来は土間の納屋的空間だった。通路部は親柱間に扉を設けた痕跡がないが、西脇間は借戸、東脇間は板壁で仕切る。天井は各室とも基本的に根太天井で、通路部前方のみ豪快な鏡天井とする。そして天井裏は一面の広い屋根裏部屋とし、正面・背面に各2箇所、側面に各1箇所の横連子窓を設けて採光する。ここでは

かつて養蚕が行われたこともある。外壁は腰壁を板壁で養生して上方を漆喰壁とする。その腰壁壁は通路部前方を化粧紙打の縦板壁、同後方を目板打縦板壁、それ以外は下見板壁と使い分ける。軸組の特長は柱を大小4種(親柱・7寸角柱・5.6寸角柱・4寸角柱)と材種(榿・杉)を使い分ける点で、隅部の太い柱が力強さを示すと同時に、扉構えに榿を集中的に用いて正面の豪華さを演出する。軒は出桁造という重厚なつくりで、さらに化粧垂木を重ねて銅板葺の屋根をつくる。ただし昭和34年の伊勢湾台風以前は寄棟造茅葺で、台風被害により応急的に鉄板葺に改造し、さらに昭和48年頃現状の銅板葺屋根に改め、天井補修や通路部背面の指物補強などを行った。出梁の先端に茅葺時代の痕跡(投首仕口)が認められるので、長屋門は本来茅葺で化粧垂木は後設である。ただ不思議なことに、現在の小屋組は緩い屋根傾斜の小屋組上に東・梁を補っている。すなわち建築当初は板葺のような屋根を計画していたが、何らかの事情で茅葺に変更したようである。ところで、扉構え部分と隅柱など扉使用部位は、風合いから見て取替材の可能性が高い。また、出梁に近代製材法による取替材が含まれており、この材も茅葺の痕跡がある。すなわち昭和34年以前に隅柱・扉構え・軒・小屋組におよぶ大修理が認められる。その契機は関東大震災である可能性が高い。横連子の高窓もこの時期の補足かも知れない。

以上、鈴木家長屋門は幕末頃の建築である可能性が高いが、関東大震災後に大修理を行い、戦後に茅葺を鉄板葺・銅板葺きへと改め、東室・西室も次第に住居としての性格を強めてきた。通路部中央の扉は大修理時に再現されなかったのかも知れない。とはいえ、基本的に当初形式の把握は可能であり、軒が高く奥行が深い外観は迫力があり、西室の出格子窓と通路部の豪華な扉構え、腰壁と漆喰壁の対比も魅力的である。旧鎌倉街道に面した屋敷景観や近隣の鎮守社・菩提寺とともに地域の誇りと同時に、貸室のような利活用を通じて生きた文化遺産として後世に伝えて欲しい。

# 明治時代の煉瓦建築遺構が関東大震災のモニュメントとして保存公開

文：株式会社 ユー・エス・シー 兼弘 彰

「キング」の神奈川県庁本庁舎と「ジャック」の横浜市開港記念館に近接する中区北仲通にあるこの煉瓦遺構は、明治時代に建てられたと推定される「開通合名会社」の社屋の一部であると考えられている。建物は、大正12(1923)年9月1日に起きた関東大震災で大部分が倒壊したが、その一部が震災後の復興建築の内部に奇跡的に残されていた。その建

物の解体時に発掘されたこの遺構は、所有者の意向により、横浜関内地域の日本人商社建築の記録と、関東大震災の記憶を伝える歴史的遺産として現地に保存されることになった。

保存修復工事では、煉瓦壁の耐震補強のため、数百本の小径の穴を空け無収縮モルタルを充填すると共に、鉄骨による転倒防止の補強がなされた。



明治38年頃の開通合名会社外観(横浜市中央図書館所蔵)

煉瓦基礎



鉄骨補強された外観

また、補強工事中に基礎の掘削調査を行った結果、横浜開港の頃築かれた土丹の地盤を切りとって煉瓦の基礎が施工されている様子が確認できた。

開通合名会社は、横浜港から陸上される貨物の通関・発送取扱事務を営んでいた商社で、大蔵省で税関貨物の取扱事務の経験を積んだ服部政により、明治10(1877)年1月に創立された「開通社」の社名を明治24(1891)年「開通合名会社」に改名。社屋は、レンガと石を組み合わせた外壁を有し、屋根は瓦葺きで建物の両

側面にはうだつ(防火壁)を設けていた。この遺構は1階中央の出入口と右側の窓部分及び右側側面の壁の一部であると考えられている。写真は明治38(1905)年頃のものとして推定される。

所有者：(有)日太刀商事 代表 池ヶ谷昭和  
 監修・協力：横浜市都市整備局 都市デザイン室 (公社)横浜歴史資産調査会  
 調査・設計・監理：(株)ユー・エス・シー  
 補強工事施工：(有)レイブリックス

# ホテル・ニューグランドのネオン看板復活!

ホテル・ニューグランド本館の耐震改修工事を検討する中で、屋上に設置されている看板についても更新の必要があることが分かった。

更新にあたっては、一度撤去し新たに設置することとなるが、ホテル・ニューグランドが面する山下公園通りは景観計画により通りに面した看板設置が禁止されているため、看板部分も歴史的建造物と一体となす保全部位に位置付け屋外広告物審議会にも付議し、特例的に認めることとなった。

この看板は、もともと昭和39(1964)

年の東京オリンピックにあわせてネオン看板として設置されたが、第1次オイルショックの影響により消灯され文字の枠だけが残されていた。

再設置にあたり、看板下地を含めて忠実に復元する外観保全工事を行い、灯具の試験点灯ではLEDとネオン管の両方が試されたが「温かみのある光を演出できる」と往時のノスタルジックな雰囲気重要視し、約40年ぶりにネオンを復活させた。

併せて実施した本館の耐震改修、躯体補修などの工事期間中は、本館外壁をブ

リントした景観に配慮した仮囲いを使うなど、貴重な歴史的建造物として、また横浜における歴史あるホテルとして永く後世に継承していく姿勢が随所に感じられた。

2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けた歴史的景観保全の取組として注目してほしい。

戦後の後補部分(復元)を積極的に保全部位に加えた初の事例である。



外観(ネオン管点灯)

外観(昼間)

# 港北OPEN! HERITAGE

(港北区)

港北区では、区内の歴史的建造物の公開を通じて、区民に地域の歴史や風土、文化を身近に感じてもらうための取組の一環として港北OPEN! HERITAGEを開催している。



妙蓮寺に残る洋館

4回目となる今回は、平成26(2014)年11月29日・30日の二日間に開催され、ボランティアガイドによる「まちあるきツアー」と「一般公開」をあわせてのべ1,600人をこえる見学者が参加した。

まちあるきツアーでは「菊名一倉山」、「日吉」、「妙蓮寺」の各コースを港北区のボランティアガイドが案内した。一般公開では洋館付住宅や西洋館、古民家、近代建築のほか洋館付住宅の建築に携わった大工棟梁の家など11件が公開された。

参加者からは「貴重な歴史的建造物を見ることができて良かった。」「参加して港北区に愛着がわいた。」「などの声があり、次回の開催が期待されている。

# 旧東海道をテーマにワークショップを開催

(保土ヶ谷区・戸塚区)

今年度も保土ヶ谷区と戸塚区で旧東海道をテーマにしたワークショップが開催された。横浜新聞第28号で紹介された「横浜旧東海道お宝自慢ワークショップ」に続くイベントであり、今回も各地域の方々が宿場町の思い出を熱く語り、大いに盛り上がった。

保土ヶ谷区では、平成26(2014)年9月22日(月)に、「旧東海道保土ヶ谷宿 まち



思い出の写真紹介の様子(戸塚)

語り・みち語りワークショップ～まちの思い出も、まちの魅力に～と題して、ほどがや地区センターで開催された。横浜国立大学の学生による保土ヶ谷宿の魅力資源の紹介やテーブルに分かれての参加者同士のディスカッションなどが行われた。ディスカッションでは、旧東海道沿道の思い出の場所や魅力ある旧東海道のまちづくりに向けたアイデアが話し合われた。短い時間ながらも多くの思い出や魅力的な提案があり、今後の旧東海道のみちづくりにつながる盛り上がりを見せた。

戸塚区では、平成26(2014)年10月29日(水)に、戸塚区役所3階多目的スペース(大)で「見て、聞いて、知って!昭和の戸塚～旧東海道の今と昔～」が開催さ

れた。横浜市歴史博物館学芸員の斉藤司氏の基調講演の後、昭和時代の戸塚駅周辺・柏尾・原宿の旧東海道に関連した写真がスクリーンに映し出され、その地域の方々それぞれに込められた思い出を語った。会場では、写真とあわせてその撮影場所の現状も映し出され、数々の懐かしい写真と思い出が紹介された。今回のワークショップには昨年度を大幅に上回る約170人の参加者が集まり、地域の方々の関心の高さが伺えた。

保土ヶ谷宿や戸塚宿の他にも、旧東海道には神奈川宿や生麦などの歴史の舞台となった場所がある。他の地域での開催など、地元への思いを強くするこのワークショップのさらなる展開を期待したい。また、地域に眠る思い出の写真は、歴史

を生かしたまちづくりを進める上でも貴重な資料である。今後のワークショップで新たなお宝が発掘されることも楽しみにしたい。

優れた美観を有するものが多く、特に橋梁の四隅に建つ親柱は、橋梁毎に固有の意匠があり、昭和初期の趣を残している。



親柱図面(横浜復興誌 第二編より)



浅山橋親柱(点灯状況)



横浜国立大学の学生が制作した屋台「ほどわごん」(保土ヶ谷)



いろいろな思い出が語られました(保土ヶ谷)

# 開港5都市が横浜に集まる! 開港5都市景観まちづくり会議 横浜大会2014

開港5都市景観まちづくり会議は、開港の地となった神戸・長崎・新潟・函館・横浜の市民団体が集まり、景観まちづくりについて交流を深める会議である。平成5(1993)年に神戸で始まり、5都市持ち回りで開催されている。横浜では平成21(2009)年大会以来、5年ぶりの開催となった。

主催は25の市民まちづくり団体によって組織された実行委員会である。前回の



神奈川県立音楽堂のホワイエ

実行委員会に加え、今回からはクリエイター集団などが加わり、幅広い観点からの企画が組まれた。平成26(2014)年10月17日～19日の3日間の大会期間中、パネルディスカッションや分科会(まちあるきやレクチャー)などが行われ、5都市から約170名の参加があった。

初日のパネルディスカッションでは、各都市の大学講師と地域団体代表がパネリストとなり、「大学連携のまちづくり」をテーマに各都市の景観まちづくりの取組が紹介された。分科会には「港と未来」「歴史を生かしたまちづくり」「創造都市とまちづくり」「オープンデータ」の4つのテーマがあり、「歴史を生かしたまちづくり」では戦後建築の活用が焦点が当てられた。この中では、神奈川県立音楽堂や都橋商店街、吉田町の防火建築帯などの視察があるとともに、横浜のまちづくりに長年かかっているコンサルタント

の菅孝能氏からの戦後建築の活用事例のレクチャーが行われた。分科会に続き、参加者は神奈川宿の田中家を訪ね、料亭文化の実体験も楽しんだ。横浜開港資料館副館長の西川武臣氏からは開港と神奈川宿の移り変わりにまつわる興味深いレクチャーがあった。最終日には大会総括が行われ、来年度の神戸大会の開催と再会を誓い合った。

開港5都市景観まちづくり会議は「横浜大会2014」で20回目の節目を迎えた。他都市参加者からは、「何度も横浜に来ているのに、初めての体験ばかりだった。」などの声がかかれ、節目にふさわしい充実した内容の会議となった。



歴史遺構の前にレクチャー



防火建築帯の視察